

氏名・（国籍）	平 燕紅（中国）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博甲第23号
学位授与年月日	令和3年3月10日
学位授与の要件	学位規程第2条第2項該当
学位論文題目	中国華嚴宗史の研究 ―唐宋時代の伝承と系統を中心に―
論文審査委員	主 査 教授 藤井 教公
	副 査 教授 落合 俊典
	副 査 准教授 池 麗梅

論文内容の要旨

本論には、これまでに見落とされてきた資料や人物について採り上げて検討を行っている。従来知られている華嚴宗の師資相承に関して、実際にまだ幾つかの問題点が残っている。初期華嚴宗を単に「宗派仏教」として検討するだけではなく、それに加えて「学派仏教」との繋がりからも検討し考察を加えなくてはならないだろうと考える。学説がよくまとめられ、独立した思想が成立すると同時に、宗派は成り立つが、それと同時に、その宗派をめぐる正統性という意識が自ら生じ、それに従ってその師資相承の系譜が創造され、そこに後人の意識や希望が加えられるのである。従って、我々は系図内の祖師たちを検討する際に、単に彼らの思想を検討するだけではなく、後人が加えたこの祖師に対する望みや変更をも考慮に入れる必要があるのである。上記の点に留意するならば、今までの華嚴宗の祖師たちに対する研究に新視点を加えることになり、従来の華嚴宗史の結果に修正を加え、華嚴宗の祖師たちを正しい位置に位置づけることができると思われる。本論文では、華嚴宗内部においての師資相承について残っている問題に着手し、これまで注目されてこなかった人物などの歴史的背景や教学説を吟味し、彼らの位置付けを再検討した上で、現在の華嚴祖師系図の修正意見を提示したい。

第一章では、『華嚴経』の訳出と華嚴宗の成立を検討した。大本『華嚴経』には、東晋訳本・日照補遺本・唐訳本・法蔵校閲本という四種類があることが知られるが、唐・般若訳『四十華嚴』と『蔵訳華嚴』の存在にもある。また、法蔵は唐代華嚴宗の真正の創立者である。

第二章では、華嚴初祖杜順の位置付けについて、鈴木大拙氏が提示した「澄観の初祖作為説」に基づいて、この宗派性の自覚的な意識をめぐる検討した。澄観は、杜順が『法界観門』を著わしたという説を最初に挙げた人物である。また、宗密の時代になると、杜順と『華嚴経』及び智儼・法蔵の関係が確定され、当時の杜順は『華嚴経』を注釈する「第一人者」と

なり、そのうえ智儼・法蔵に対して重大な影響を与えた人物とされるようになった。このようにして、杜順の『法界観門』が後世の華嚴宗の人々に大きな影響を与え、歴史上、彼が華嚴初祖になったことが理解できると考えられる。

第三章は、三祖法蔵の弟子慧苑及び其の弟子法洗さらに彼の弟子会稽神秀に対する検討である。ここでは、慧苑の弟子としての法洗（銑）、及び彼の弟子たち、特に北宗禅の神秀と同名の会稽神秀を詳しく検討した。まず、法洗（銑）が法蔵と慧苑の解釈を共に参考にしたことは、明らかである。また、義天録所載の『華嚴経疏』三十巻と『妙理円成観』三巻が、華嚴宗の会稽神秀の作品であるということが確認されている。会稽神秀は、その二つの著作において法蔵の考え方を利用して自身の観点を論証したことになる。

第四章は、宗密以後浄源以前の間の華嚴教学の発展や師承系譜の検討を行うものである。華嚴宗の第六祖の玄珪は宗密の弟子として、字を徹徹、名を真奥と言った。彼は 811 年から 841 年までの間にはまだ活動的な状態であったことがわかる。第七祖の月朗は宗密の思想を受け、宗密の著作に基づいて自身の多くの著作を完成させ、二十余年もの間華嚴学に専念し、『起信論』や『円覚経』等の経論に心酔し、「戒定慧」三学を共に重んじており、禅教二門を共に重視し、彼の法弟である性光法師と共に第八祖である守真を『起信論』と『法界観』へと教え導いた。第八祖の守真は多く華嚴学に関わる著作を著わし、一生の間に『起信論』と『法界観』を 70 余回講演した。また、八祖守真を例として、華嚴宗の宗派師承の系図は宋代以後に浄源が率先して完成させたものであるということを一層確認した。

第五章は、石壁寺の伝奥に関する全面的な研究である。本章では、先行研究に基づきつつも、新たに伝奥に関する様々な資料を検討し、伝奥の生涯、宗密の著作と弟子筋、伝奥の教判思想と律学思想、及び彼と宗密との関係を検討し、伝奥が思想史上に果たした役割を明らかにして、最後に彼の華嚴門人としての位置付けを再確認した。伝奥が法蔵・澄観・宗密から思想的な影響を受けたことが知られるが、それ以上伝奥が華嚴宗師であるとの判断はできないと考えられる。なぜなら伝奥が浄土宗の祖庭である玄中寺（玄中寺は、別に律寺としての性格も有していた）に居住していたことと、また彼が豊富な律学の知識を備えていたということは否定できないということからである。伝奥が律僧であるという可能性もあると考えられる。

第六章は、今まで注目されてこなかった華嚴学の背景を備える人師たちに焦点を当てる。元朗という人物は、法蔵撰『義記』を注釈する書物としての『集釈記』を著し、正しく法蔵の原義を示す。また、元朗撰『集釈記』と澄観撰『演義鈔』の繋がりに従って、元朗の生存年代を一層縮小することができる。また、北宋中期の玉溪延俊は、『起信論演奥鈔（抄）』を著した。彼は法蔵と宗密の思想を受け、自身の「以義分教」を完成し、自身の五宗五教観念を詳細に説明した。元朗と延俊は間違いなく、宋代の「二水四家」以外にも注目されるべき人師として無視できない存在である。しかし、注意しなければならないのは、ここまで確認できるものが、元朗と延俊が華嚴学の背景を備えるというものである。これより彼らを華嚴宗の人物となすのは、危険である。この点に関しては、また多く証拠が必要と思われる。

以上のことから、本論文は、華嚴初祖をめぐる論争、三祖法蔵の弟子慧苑及び彼の弟子法

誦という一系の発展、五祖宗密から十祖浄源までの間の華嚴教学の発展及びその祖師系図の成立、石壁伝奥と宗密の関係、宋代の忘れられた華嚴学の背景を備える人師たちの研究等を究明し、それによって唐宋時期の華嚴学の発展と祖師系図の研究を完全なものにしたい。また、本論により得られた結論として、従来、学界で等閑視され、看過されてきたような課題や分野について扱い、研究を行ってきたというものであるといえる。

論文審査の結果の要旨

本論文は中国華嚴宗について、その隋代初期から唐宋時代に至るまでの歴史を思想史と歴史学との二つの立場に立って跡づけようとした論文である。著者は従来混同されがちな「宗派」と「学派」を峻別し、両者の歴史的推移は区別されるべきとの前提に基づいて、初祖とされる杜順から十祖浄源までの師資相承を取り上げて検討し、さらにはこれまで等閑視されてきた石壁伝奥、玄朗や玉溪延俊などの人物をクローズアップして、華嚴宗史の上に正しく位置づけようとの野心的な企てを試みている。

論文は序論と六章からなる本論、それに結論から成る。序論は問題の所在と研究の目的、先行研究と研究史の回顧、研究方法と資料について触れているが、先行研究中に現代中国の研究者の成果について取り上げているのは利点の一つである。

第一章では『華嚴経』の訳出状況について触れ、それらのテキスト研究によって華嚴宗が成立したが、華嚴宗の真正な創立者は法蔵であるという複数の先行業績を示し、それに賛意を示している。

第二章では、華嚴宗の初祖について、従来の杜順説と智正説とを検討し、杜順説が澄観、宗密のころになって有力視され、確定されたことについて、先行業績を踏まえながら論じている。

第三章では、三祖法蔵の弟子慧苑とその弟子法説、及びその弟子の会稽神秀の三師に対する検討を行い、特に義天録所載の『華嚴経疏』三十巻と『妙理円成観』三巻の二著が、従来の見解では北宗禅の神秀の著作とされてきたことに疑義を呈し、二著の内容検討を通して、これが華嚴宗の会稽神秀の著作である可能性が極めて高いと結論づけた。また、慧苑の系統が従来華嚴宗から異端視とされてきたことについて、その異端視は、宋代の贊寧から志磐に至る三百年間になされたものとし、特に宋代の浄源以降に、正統華嚴と認められなくなったとする。従来、慧苑の系統については詳細には取り上げられてこなかったが、著者が検討を加えたことにより議論の活発化が期待される。

第四章では、宗密以後浄源以前までの華嚴教学と師承系譜の検討がなされている。華嚴宗の第六祖玄珪は宗密の弟子であり、第七祖の月朗は宗密の思想を受けると同時に禅教二門を重視し、第八祖である守真を弟子として導いた。したがって第五祖と第六祖、第七祖と第八祖との間には師弟関係が認められるが、第六祖と第七祖との間にはそれが窺われないとする。

また著者は華嚴宗の祖師系図が、いつ頃、誰によって制せられたのかを探るため、第八祖

守真を取り上げて、守真は自身が華嚴の門人であることを自認していなかったのではないかという問題を提起し、結論として守真を華嚴第八祖として祖師系図に組み込んだのは浄源であるとしている。

第五章は、華嚴宗の門人とされる石壁寺の伝奥に関する検討である。先行研究に基づきながら、新たな伝奥に関する資料を検討し、伝奥の生涯、宗密との関係、その教判思想と戒律思想などを検討し、彼の華嚴門人としての位置付けを再検討している。著者は伝奥が法蔵・澄観・宗密から思想的な影響を受けたことは否定できないが、彼が浄土教の祖庭である玄中寺に住していた点、また彼が『梵網經記』を著して菩薩戒に詳しかった点などから、彼が律僧であった可能性もあると論じ、新しい見解を提示している。

第六章は、これまで余り注目されてこなかった華嚴学の学殖を具えた人師として唐末宋初の元朗と玉溪延俊を取り上げている。元朗は法蔵撰『大乘起信論義記』の注釈である『大乘起信論集釈鈔』を著し、北宋中期の玉溪延俊は、『起信論演奥鈔』を著した。それらの著作の内容からすれば、両人は華嚴宗の人師と見做されるが、しかし著者はその判定にはさらにより多くの証拠が必要であるとの慎重な意見を述べている。

最後に結論として、これまで華嚴宗の教学的展開と宗派的推移という二つの立場から、華嚴宗初祖をめぐる論争、三祖法蔵の弟子慧苑及び彼の弟子法説という一系の発展、五祖宗密から十祖浄源までの間の華嚴教学の発展及びその祖師系図の成立、石壁伝奥と宗密の関係、唐末宋初における華嚴学の背景を備える人師たちの検討を行い、これらの結果によって唐宋時期の華嚴学の消長と発展、祖師系図の成立と変遷とを明かにすることができたとする。

本論は、中国華嚴宗を扱っているが、その時代的範囲は唐初から北宋にかけての長期間に及び、また検討する人師も初祖杜順から十祖浄源、玄朗、延俊にまでを対象としている。それで各トピックの内容的関連の希薄化と叙述の散漫化が危惧されたが、著者の一貫した問題意識が各トピックの緊密な関連を維持させ、無駄のない文体とともに叙述の散漫化を防ぐことに成功している。

内容的には、これまで言及の少なかった慧苑系統の人師を取り上げ、華嚴の会稽神秀と北宗禪の神秀との相違を明確化したことは功績の一つであり、華嚴宗の師資相承で、六祖玄奘から十祖浄源までの系譜を明確化したことの意義も大きい。また、先行研究の少ない石壁伝奥や、玄朗、延俊などの人師を取り上げて検討したことも評価できる。ただ、問題の一つは、それぞれの命題において、直接的証拠となる資料が不足していることであり、従来の先行研究が少ないのもそれが理由となっていると思われる。そのような状況の中で著者は、これまで見落とされていたり、等閑視されていた資料を丁寧に読み込んで用い、現時点でなしうる努力を注ぎ込んでいる。

また、本論文には叙述が急なあまり、文章が文意を十分表していない所も見受けられるが、論文の内容自体を損なうものではない。

よって、以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に十分値する成果であると評価するものである。